

はじめての仏教説話

出雲路 修

出雲路です。朝比奈先生からたいそう立派なご紹介をいただきまして恐縮です。わたくしのこれからお話しすることはそんなに立派な内容ではありませんので、初めから終わりまでしっかり聞きますと、「良いことは一つも言わなかった」と思われてしまいそうです。ところどころ居眠りしてください。そうしますと、「あの先生は私が眠っている間にきくと素晴らしいことを言ったはずだ。居眠りした私が悪かった」となりますので、そのほうが嬉しいです。

今日は『はじめての仏教説話』という題名でお話しいたします。「仏教説話」なんていうのは、みなさんにはあまり興味が無さそうな世界だと思うのですが、お聞きのみなさんには最後には興味を持っていただけるようにしたいと思います。

「仏教説話」というのは、要するに「仏教を説いた説話」なんです。「仏教」というのは

どういふものかということを一歩簡単に説明してあるのが、白居易、ご存じの白楽天ですが、鳥窠道林禪師ちようかという人との問答です。この話は『景德伝燈録』にあります。これは非常に有名な話です。白居易が訊ねるのです、「如何なるか是れ仏法の大意」と。何が「仏法の大意」なのか。「仏法の要点を教えてくれ」と。鳥窠道林禪師は答えるのです、「諸悪莫作 衆善奉行」と。仏教の要点はここだと。簡単に言いますと、「悪いことはしてはいけませんよ、良いことをしましょう」ということです。えっ、仏教ってそんなことか？と我々は思うのですが、白居易もそう思ったみたいで、「三歳の孩兒がしじまたかくのごとくいふをしるなり」。「そんなこと三つの子どもでも分かってるじゃないですか。『悪いことしちやいけません、良いことをしましょう』というのはい」。すると、禪師が言うには、「三歳の孩兒も道いふを得と雖も、八十の老人も行ふことを得ず」。「三歳の子どもでも分かってるけれども、八十の老人も実行できない。それがこの『良いことをしましょう。悪いことしちやいけません』。そういうことなんだ。それが仏教の要なんだ」と言うのです。

「仏教」といふのはそういう宗教であり、「仏教説話」といふのは、そのような「仏教」の教えを説くための「説話」なのです。

「説話」といふのは何かと言いますと、お話なのです。お話とか物語とか逸話とか、さ

はじめの仏教説話

さまざまな昔話もそうです。端的に言うとお話なのですが、何かの道具に使うお話のことを「説話」と言うのです。「仏教説話」というのは仏教を広めるための道具に使うお話なのです。

鳥窠道林禪師は、仏教の大意を聞かれ、「良いことしましよ、悪いことしちやいけません」と言いました。

では、わたくしが考えている「仏教」はどういう思想かと言いますと、「仏教」というのは、基本的には、「流されるだけの人生じゃないんだ」という思想です。「自分の行いで自分の人生を変えることができるんだ」と。そこが基本だと思うのです。運命論じゃなくして、自分の意志で変えていくことができる、そういう人生。そして究極の目的が「目覚めた人」に成る。目覚めた人に成るための道筋を説いたものが「仏教」です、そういう世界があるのだぞ、そういう世界は素晴らしいのだぞ、と説いたものが「仏教説話」だと言っていると思います。

「仏教説話」の基本は「良いことをしなさい。悪いことしちやダメよ」。じゃあ、何が「良いこと」で、何が「悪いこと」か、と言いますと、目覚めた人に成るためのポイントになるのが「良いこと」です。マイナスのポイントになるのが「悪いこと」なんです。だ

から、どういうふうにするとポイントが貯まるかということをお教えるのが「仏教説話」なんです。「こういうことをすると良いですよ、こういうことしちゃいけませんよ」ともつと言いますと、どこのお店で買い物をしたほうがポイントが貯めやすいか、どこのお観音様がいいか、どこの阿弥陀様がいいか、どのお経がいいか、という、ポイントの貯まりやすいお店をも教えてくれるというのが「仏教説話」なんです。

結局、「仏教説話」とは何かと言いますと、「良いことをしましょう、悪いことはしちゃいけません」。良いこととは何か、「目覚めた人になるためのポイントになること」。悪いこととは「目覚めた人になるためのポイントにならないこと」。そういうことを説いたのが「仏教説話」です。

源為憲の『三宝絵』という説話集に、「善き事おこなへば福いたり、悪しき事おこなへば禍きたる」、「良いことをすれば良い目にあいますよ、悪いことをするととんでもない目にあいますよ」とあります。これが、全ての「仏教説話」のテーマです。「善因善果 悪因悪果」「因果応報」「因縁」「縁起」「果報」……さまざまな言葉で示されますけれども、要するに「仏に成る道」、目が覚めた生き方をするにはどうすればいいかということをお、ポイントの貯め方あたりを中心に説いたものが「仏教説話」です。

はじめの仏教説話

以上で「仏教説話」の説明は終わりです…と言いますと、実際の「仏教説話」は何だかつまらなそうだなと、皆さんは予想してしまうのです。「良いことをしましょう、悪いこととしちゃいけません」といったお話…つまらなそうなんですけれども、そこを上手に、皆さんに居眠りさせずに聞かそうという工夫がなされているのが「仏教説話」の現物です。どういったものがあつて、どういうふうな工夫がなされているか、そこをちゃんと読んでいくことが大変重要だと思います。

和辻哲郎の『埋もれた日本』に「苦しむ神 死んで甦る神」について書かれた箇所があります。日本文学はどの辺りが一番面白いかと言いますと、和辻哲郎の『埋もれた日本』(これは新潮文庫に入っています)、すごいものですからぜひお読みください。これを読みますと卒業論文なんかすぐ書けます。非常に手軽に日本文学の面白さを伝えてくれます。何が書いてあるかと言いますと、主に室町時代、もちろん戦国時代、江戸時代の初めくらいのが書いてあるんですけども、室町時代の文学にはいろいろ不思議な物語が満ちあふれている。どういう物語かと言いますと、主人公が辛い目にあつて、そして最終的に神になっていく物語。例えば『熊野の本地』なんかですと、インドの摩訶陀国という国に宮殿があるのですが、そこにある王様がいる。その王様のお后があまりにも美人であまり

にも素晴らしい人だったので、後宮の他の女性から妬みをもって最終的に殺されるので、その女性は、赤ちゃんができてお腹が大きいつきに山の中に捨てられるのです。後宮の女性たちの謀略のために冤罪で捨てられるのです。捨てられて首を斬られるのです。テキストによっては首を斬られる前であったり後だったりするので、赤ちゃんが産まれるのです。そして産まれた赤ちゃんを首のないお后がおっぱいを吸わせてずっと育てるのです。やがて首のない遺体が消えて、その後は動物がその少年を育てるんです。テキストによつていろいろなのですが、最終的にお母さんを甦らせる場合もありますし、甦らせない場合もあるのですが、そうやって育った少年が最終的に熊野の神様になりました、という話なのです。首のない死体が、産んだ子をおっぱいを飲ませて育てるといふ、非常に残酷趣味な凄絶な画面、絵で描くとそうなりますが、そういうような場面が続く、そういうような物語が『熊野の本地』だけじゃなくて、いっぱい室町時代から日本に増えてきた。そういう物語がいっぱいあったお蔭で、十字架の上で死んでいったイエス・キリストの物語がすんなりと受け入れられた、というのが和辻哲郎の考えなのです。これは非常に良い本ですからぜひお読みください。

こういうふうには、捨てられた少年が苦しみの果てに最終的に神になるという物語が、と

はじめの仏教説話

もかく中世の日本、とくに室町時代以降多くなるのです。それはおそらくは仏教の影響だ
 と思うのです。だいたいヨーロッパの思想では少年が神に成ったりはしないのです。神様
 は神様なのです。人間は人間なのです。何かをして人間が神に成る、というのは仏教の世
 界では当たり前のことなのですけど、他の宗教では必ずしもそうではない。仏教は「神の
 いない宗教」と言う方もおられますけれども、「人間が神に成る宗教」なんです。たかが
 人間が成ったような仏陀が最高神です。人間が神に成っていくのです。室町時代以降、苦
 しむ神の話がいっぱい出てきた。それは大きくみて仏教の影響だと思っんです。人間が神
 に成っていくというのは非常に仏教的だと思うのです。仏教の基本は、「人間は神に成
 る」、「人間は仏陀に成る」。「仏に成る」…と云うのですけれど、誰がやっても同じこと
 すればちゃんと仏に成るんだと、こういう「方法」がありますよ、と示してくれるのが仏
 教であって、それを説いたお話が「仏教説話」なんです。

そういったことで「仏教説話」の概略を申しました。これで「仏教説話」の説明は終わ
 りました。あとは具体例です。

『日本国現報善悪靈異記』という、日本の仏教説話集の最初です。これは漢文で書かれ
 ています。こういった漢文を、平安時代の初めの人だとおそらくこういうふう
 に読んだ

ろうという、そういった予想で読んだわたくしの訓読文です。古文は、みんな嫌でしょ？
 古文の読み方には実はコツがあるんです。一つは、何と言っても日本語ですから、「分かるはずだ」、その信仰心が必要です。もう一つは、分からなくても分かったことにして読み進めるんです。これが二つ目です。この二つがあれば大抵分かります。我々、現代語の文章であつても、難しい話ですと半分も分かりませんでしょ。でも、分かったことにして読み進めばそれでいいのです。それで分かるのです。だいたいそんなものです。言葉はだいたい分かるってことが前提ですから、お互いに分かった顔をしていればいいんです。

さて、『日本国現報善悪靈異記』下巻第十四縁に「千手呪を憶え持つ者を拍ちて現に悪しき死の報を得る縁」というのがあります。「千手呪」というのは、『千手陀羅尼』という、『大悲心陀羅尼』という呪文があるんです。いつもいつもその呪文を読んでいる人をぶん殴った人が、非常に見苦しい死に様の報いを得たというお話です。だからそんなことをしてはいけませんよというお話です。ざっと読みますと、

“越前国加賀郡” 今の石川県です。その土地に、

“浮浪人の長有り” 浮浪人というのは本籍地を離れてあちらこちらホームレス的に暮らす人です。その長、ホームレスのリーダーがいた。その人は、

はじめての仏教説話

“浮浪人を探りて雑の徭に馳せ使ひ、調と庸とを徴り乞ふ” 何をしたかというところ、そういった仲間を探しだしてきていろんな労働力に使い、そしていろんな物とか(「調」というのは租庸調の「調」、「庸」というのは労役代わりに提供する物品です) そういったもの、労力も利用したし物をも取った。そこに、

“京戸小野朝臣庭磨といふひと有り” 京都が本籍の人がいた。

“優婆塞と為り” 優婆塞というのは、坊さんの格好はしてないですけど仏教信者です。

“常に千手の呪を誦み持つことを業とす” 『大悲心陀羅尼』をいつも読んでいた。

“彼の加賀郡の部内の山を展転りて修行ふ” 加賀の辺りの山の中で修行をしていた。

“神護景雲三年” 西暦で七六九年、

“歳の己酉に次るとしの春三月の二十六日の午時に” 神護景雲三年の春三月二十六日というのは午の日なんです、ウマの日のウマの時です。

“其の長其の郡の部内の御馬河里に有りて” ウマの里です。金沢市にあります。

“行者に遇ひて曰く「汝はいづれの国の人ぞ」といふ” 行者というのは小野朝臣庭磨です。ホームレスのリーダーが、庭磨という仏教修行をしている人に出逢って言うんです。

「お前はどこの人間だ？」と。すると、

「我れは修行者なり。俗人にあらず」。「私は坊さんなんだ」と。俗人じゃないんだからあなたのいうホームレスじゃない。修行をして歩いているんだと言うんです。だからあなたの指図は受けない、と。

「長瞋りて嘖めて言はく「汝は浮浪人なり。なにぞ調を輪さざる」」「お前はホームレスだ。ちゃんとオレに物をよこせ」。そして、その小野朝臣庭磨を、

「縛り打ちて駆せ徭へば」 縛つてぶん殴つて労働をさせたんです。そうすると庭磨は、
「なほ拒み逆ひて、懇びて譬を引きて言さく「衣の虱も頭に上れば黒く成り、頭の虱も衣に下るれば白く成る」と。是くの如き譬有り。頂に陀羅尼を載せ経を負ふ意は、俗の難に遭はじとなり。なにゆゑぞ大乘を持つ我れを打ち辱むる」。坊さんであろうが俗人であろうが同じなんだということを言っているんだと思います。陀羅尼を頭の上に乗せてお経を背負っている、そういうことを何故したかというのと、そういう修行をしていると世の中の禍に遭わないということなんだ。ところがどうして私がこんな酷い目を受けるんだと。お経に呼びかけるのです。

「実に験徳有らば、今威き力を示せ」 私が今まで大事にしてきたお経よ、お前が本当に効き目があるんだつたらちゃんと私を助けよと。

はじめての仏教説話

そして、『千手経』という自分の大事にしていたお経を引っ括って、地べたを引きずり廻す。お経に、わたしをちゃんと助けよ、と脅迫するわけです。

そうすると、小野朝臣庭麿をいじめた長が自分の家の門のところをやってきて馬から降りようとすんだけれども、降りることができない。そして馬と一緒に空を飛びだした。空の上へくーっと上がった。一晚経って、明るる日の午の時に空からドンと落ちて死んだ。そしてバラバラになった…と。

そのように書いてあります。「お経を誹る者は酷い目にあうぞ」とお経に書いてある、という説話です。

この説話、一体何を説いたか分からないでしょ。『千手の呪』というお経を大事にしていた人間をいじめたらこんな酷い目にあうぞ、という説話であることは間違いない。

その酷い目の具体的なありかたに注目しましょう。馬に乗って空中にずっと漂っている、その明るる日にストーンと落ちてバラバラになって死んだ。じつは、「空中に漂う」ということと『千手の呪』という呪文とのふたつが登場する『猫檀家』という非常に不思議な昔話を、わたくしたちは知っております。

あるお寺にお坊さんがいた。そのお坊さんに大事にされている猫がいた。猫の名前は卜

ラ。ところがお寺があまり流行らないものですから、その和尚さんに恩返しするために、参詣客が増えるように猫はいろいろな力を尽くそうと工夫するのです。どういうことをするかと言いますと、超能力を発揮するお坊さんであればきつと参詣客も増えるだろう、と考えるのです。そしてそのお坊さんが超能力を発揮しているように見せかけるのです。あるお金持ちのお宅のお葬式の時に猫が棺桶の中に入り込むのです。猫の名前はトラです。そうして、その棺桶が突然空中に上がるのです。お坊さんが呪文を唱えるところその棺桶がスーッと降りてくるという、そういう超能力を猫が示そうと言ってお坊さんと協力するのです。その時の合図が、お坊さんの読むお経が『大悲心陀羅尼』です。『日本霊異記』に書かれた『千手の呪』と同じです。

南無喝囉怛那哆囉夜哪（なむからたんのうとらやーやー） 南無阿唎哪（なむおりやー）
： 阿唎哪（おりやー）： 陀羅陀羅（とーらーとーら）：

猫が空中に上がっているのです。トラというのは猫ですよ。棺桶で上がっていると和尚さんの声が聞こえてくる。「トラや、トラや」と。そして「おりや、おりや」って言うのです。「トラや、降りや」。それじゃあ…って降りて来るのです。

『猫檀家』っていうのはそういう話です。

はじめの仏教説話

同じ呪文が『日本靈異記』のここに使われております。馬に乗ってフワッと上がった。本来なら『千手の呪』『大悲心陀羅尼』を読んで、「降りや、降りや」と唱えると、馬に乗った浮浪人の長が降りてくるはずなんです。「降りや、降りや」と唱えてくれるような修行をしていた人をはじめたもんですから、降りることができなくてドサツと落ちてバラバラになったというストーリーだと思っております。そういう話なのです、きつと。

その次に、『太平記』に、

“抑金堂の本尊は生身の弥勒にて渡らせ給へば、かくては如何とて或衆徒御首許を取って、藪の中に隠し置きたりけるが…” あるお寺の本尊が弥勒菩薩だった。その弥勒菩薩の首を切って、悪い奴が藪の中に隠しておいた。そうすると弥勒菩薩が言うのです。

“…鋸を以て我が首を切りし間、「阿逸多」といへども叶はず…” 私は「あいた」と言ったのだけれど首を切られてしまった。「阿逸多（あいつた）」というのは弥勒菩薩の名前なんです。『太平記』には、弥勒菩薩が首を切られるときに「あいた」と言った、と書かれています。そう思って見ますと『日本靈異記』で首を切られたり身体が痛いつて「あいた、あいた」って叫んで壊れた仏像が発見されたりしているケースで、弥勒菩薩の例が多いんです。中巻第二十三緑、中巻第二十六緑、下巻第十七緑、下巻第二十八緑…こ

れだけ弥勒菩薩が、首を切られた、腕を折られた、「あいた、あいた」って言っているのです。このことはきつと、「阿逸多」は弥勒菩薩の名前ですから、そこから連想してこういったお話ができたのだろうか。

我々は、経文とか外国の文章とか、変な音、変な発音だと変なイメージを持ってしまふ。外国の人の名前で、ちよつと笑ってしまふような、日本語からすると妙なことを連想してしまう名前がありますけれども、我々は外国語には本来の意味とは違ったイメージを感じるわけです。お経というものは、あるいは呪文、インドの言葉にそういうことを感じた人は多いと思うのです。変な言葉だなあと。弥勒菩薩が「あいた」、何が痛いんだろうか。そういうふう感じた人は多いと思うのです。それから『大悲心陀羅尼』は、「おりや、おりや」「とらや、とらや」と言っている。『猫檀家』の昔話です。『日本靈異記』での『千手の呪』も、「降りや、降りや」という呪文だと説話を作った人は思ったのでしょうか。そういったように妙な発音といえますか、言葉の音に絡んだ連想でこういった説話ができました。

もつと変わったのは、『冥報記』という、七世紀中頃に中国で成立した説話集があるのですが、その中に中書令岑文本しんぶんぽんという人が出てくる。「岑文本」という名前のこの人は

はじめての仏教説話

『法華経普門品』というお経を大事にしていた人なのです。ところが『今昔物語集』になりますと、この「岑文本」という人の名前を「峯文本」に変えてしまったのです。同じような字ですけど、変えてしまう。『今昔物語集』のこの「峯文本」、おそらくは、「峯」は「ふ」、「文」は「もん」、「本」は「ぼん」、と読ませるつもりでしょう。「岑文本」という主人公の名の字をちょこちょこつと変えるだけで、「普門品」を大事にした「峯文本」さんの話になるんです。聞くと、あ、面白いなど。妙な工夫を感じ取って面白がる、そういう人もいたと思います。

「仏教説話」、「仏教」というのは、悟り、涅槃とか、向こう側の世界です。「説話」っていうのは言葉です。こちら側の世界です。こちら側の世界は、こちら側の人たちの興味を惹くように、ちよつとでも耳を傾けてくれますようにと、そういう配慮があります。だって世の中そうでしょう。学生さんに話しても…、世の中だいたい、どれだけ言っても聞かない人と、言わなくても分かっている人だけでしょ。言えれば分かったという人は本当は多くいて欲しいんですが、実際はさほど…。結局、何も言わなくても分かっている人と、言ってもダメな人ばかりの印象を受けたりするので。そうすると言葉って虚しいなとも思うんですけれども、ちよつとでも、どんなにパーセンテージが低くても耳を傾けてほしいと

いうところがありますから、こういった「お、面白いな」と興味を惹くようなものが工夫されてくるわけです。

“閻羅王の使の鬼召さるる人の賂を得て免す縁”『日本靈異記』中巻の第二十四縁のお話です。これはたいそう面白い話です。

“檜磐嶋は、諸楽の左京の六条五坊の人なり。大安寺の西の里に居住む。聖武天皇の世に、其の大安寺の修多羅羅分の錢三十貫を借りて” 奈良時代ですと、各お寺に研究グループがありまして、修多羅羅宗という經典研究グループですが、そこへ国の予算がつくのです。その予算としておりたお金を本当はそのまま使えばいいんですけど、昔からお坊さんというのはちよつと金儲けの気持ちがありますので、もうちよつと儲けてから、増やしてから使おうという気になるものですから貸し出すのです。利息をつけて返ってきて増えるから使おうと。

“越前の都魯鹿津に往きて交易ひ、これを以ちて運び超えむとして船に載せ、家に来らむとする時に” 檜の磐嶋という人が、奈良の大安寺のお金を借りて商売をして、船に乗って家に帰ろうとする。敦賀から奈良まで船で帰ろうとて、当然全部が船ではありませぬ。いろんなコースがあるのですが、とにかく帰ろうとする。そして、

はじめの仏教説話

“忽然に病を得たり” 病氣になった。

“船を留めてひとり家に来らむと思ひて、馬を借り乗りて来る”

“近江の高嶋郡の磯鹿辛前に至りてかへりみれば”

“三人追ひ来る” 三人追いかけて来た。

“後るるほど一町ばかりなり” 一〇〇メートルほど後から来た。

“山代の宇治崎に至る時に、近く追ひ付き” 滋賀県から宇治まで来てやっと追いついた。

“共に副ひ行く” 一緒に並んで行く。

“磐嶋問ひていはく「何に往く人ぞ」” 「あんたは誰だ」「どこへ行くんだ」と、追いかけてきた三人に言うのです。するとその三人は、

“閻羅王の闕の檜磐嶋を召しに往く使なり” 閻羅王というのは日本では閻魔様、閻魔大王という言い方をします。ヤーマラージャ、閻羅王の「羅」は「ラージャ」の略。王様。マハラジャの「ラジャ」です。この時代は閻羅王という言い方が多いんです。要するに死後の世界の王様です。死後の世界の王様の宮殿から檜の磐嶋という男を連れに行く使者なんだと。そこで、「いや、檜の磐嶋は私なんだ、何で私を呼ぶのだ？」と言うと、使

の鬼——何で“鬼”と言うかというのと、“鬼”という言葉は本来は“死んだ人”という意味です。死んだ人が死後の世界の手伝いをやっているのですが、——その鬼が言うには、「私があなたの家に行って聞いたたら、商売に行つてまだ帰つて来ないつて言うんです。だから追いかけて行つたんだ」と。そして次、四天王の使者がやって来て、「この男は寺の商い、寺のお金を増やす、そういうことをやっているのだから、許してやってくれ」つて言うんです。ところが、「そんなこと言われても何日も何日もあんたを追いかけていたものですからお腹が減つた」と、死後の世界の鬼たちが言うのです。すると、磐嶋が言うには「ただ、私には干飯しかないんだ」と。一応、その干飯を食べさせるんです。すると、鬼が言うんですが、「私の毒気にお前は身体を壊すだろう。だから私には近づくな」と。櫛の磐嶋は干飯だけじゃダメだと、もうちょっとこの鬼に何か賄賂をわたせば死なずに済むんじゃないかと思つて、家で接待をしようとする、鬼が言うのです。「私は、牛肉が好きなんだ。だから牛肉をよこせ」と。磐嶋が言うには、「私の家にはまだらの牛が二頭いる。これをあんたにあげよう。だから許してくれ」と。すると、鬼が「私はあなたをのをいっばいもらつて食べた。その恩返しにあなたを死後の世界に連れていかないで終わると、自分は罰せられるんだ。だから……」だからそういうことできないつて言うんじ

はじめての仏教説話

やないんですよ。「…だから、あんたと同い年の人はいないか」と言ってます。代わりに
そいつを連れて行こうと言ってます。悪いヤツです。「あなたは何年だ?」「私は寅年だ」
と。どこそこの占いをやっている男があんたと同じ寅年なんだと、じゃあそれを連れて行
こうと。…というような話をして、地獄の鬼に賄賂をやって身代わりの人を連れて行かせ
て自分は助かった。これが「仏教説話」です。ありがたい話です。一番最後に何て書いて
あるかというと、

“大唐の徳玄は” 中国の徳玄という人は、

“般若の力を被りて閻羅王の使に召さるる難を脱る。日本の磐嶋は寺の商の錢を受けて
閻羅王の使の鬼に追ひ召さるる難を脱る”

楯の磐嶋は死後の世界からやってきた使者の鬼に、おいしいもの、牛肉をやって死なず
に済んだ…そういうことは書いてないのです。“寺の商の錢を受けて”、寺の財産を増やす
手伝いをしていたので助かったんだぞ、と言っているのです。だからお寺さんのお金を増やす手
伝いをしなさいよ、と説いた話なのです。だけどこれを聞いた人はそうは思わないでし
よ。変なんです、「仏教説話」っていうのは。別のことを言っている話のような印象が強
いのです。

次が非常に面白いんですが、丁寧に説明しないと本当に話が分からなくなるんです。

「閻羅王の使の鬼召さるる人の饗を受けて恩を報ゆる縁」『日本霊異記』中巻第二十五縁。話が本当に分からなくなりますよ。

「讃岐国山田郡に布敷臣衣女といふひと有り」衣女という人がいた。

「聖武天皇の代に、衣女忽に病を得。時に偉しく百の味を備へて門の左右に祭り、疫神に賂ひて饗す」衣女という女の人が、病気になって病気の神様にお供え物をした。そこへ、

「閻羅王の使の鬼来りて衣女を召す」衣女さんを死後の世界へ連れて行こうと死後の世界から使者がやってきた。ところが、

「其の鬼走り疲れ、祭れる食を見ておもねりて就きて受く」おべんちゃら言って、どうしてもあの食べ物欲しいって言うんです。病気の神様にお供えした物を欲しいって言うんです。そうして、そのお供え物ももらって食べてしまう。

「鬼衣女に語りて言はく「我れ汝が饗を受く。故に汝の恩を報いむ」」地獄の鬼が衣女に言うんです、「私はあなたから御馳走をもらった。だからあなたに恩返しをしたい」。

「もし同じき姓同じき名の人有りや」「同姓同名の人いませんか」と言うんです。悪

はじめての仏教説話

いやツでしょ。誰それさんを死後の世界へ連れて行く代わりに、自分は賄賂をもらったから、同姓同名の人のいませんか？って。先ほどの檜の磐嶋は同い年の人のいませんか？です。帳簿上ごまかそうという死後の世界のお役人。すると、

“衣女答へて言はく「同じき国鵜垂郡に同じき姓の衣女有り」といふ” 「鵜垂郡に同姓同名の衣女さんいますよ」と言うんです。そこで、

“鬼衣女を率て” 山田郡の衣女さんを連れて、

“鵜垂郡の衣女の家へ往きて、対面ふ” 対面するんです。

“緋の囊より” 真っ赤な袋から、

“一尺の鑿を出して、額に打ち立て、すなはち召して將て去る” 鵜垂の衣女さんを連れて死後の世界へ行くんです。

“彼の山田郡の衣女はかくして家に帰す”

そして死後の世界の話になります。

“時に閻羅王待ち校へて言はく「此れ召せる衣女にあらず” 「山田の衣女を連れて来い」と言ったのに鵜垂の衣女を連れて来た。

“誤ち召すなり” “「だから違うんだ」と。

「然ればしばらく此に留め、すみやかに往きて山田郡の衣女を召せ」とのたまふ。「連れて来るはずの人間をちゃんと連れて来い」と言うんです。

「鬼かくすこと得ず。ふたたび山田郡の衣女を召して將て来る」そこで死ぬはずだった山田郡の衣女を連れて来た。

「閻羅王待ち見て言はく「当に是れ召せる衣女なり」とのたまふ」これでちゃんと死ぬべき山田郡の衣女が死んで、そしていつとき代わりに連れてきた鵜垂郡の衣女を返すと。

これからが話が分からなくなります。よく聞いてください。

「往ける彼の鵜垂郡の衣女は、家に帰る。三日の頃を経て鵜垂郡の衣女の身を焼き失ふ」鵜垂郡の衣女を返したところ、もう火葬にしてあつて死体が無かつたんです。そこで、「また還りて閻羅王に愁へて白さく「体を失ひて依るところ無し」とまうす」「生き返れと言われたんですが、還つてみたらもう自分の体が無かつたわ」と。

「時に王問ひて言はく「山田郡の衣女の体有りや」とのたまふ」「ちゃんと死なせた山田郡の衣女の体は残つとるか?」と言うんです。

「答へて言さく「有り」とまうす」「残つてますよ」と。

「王言はく「其れを得て汝の身とせよ」とのたまふ」「じゃ、それをあんたの体にしな

はじめの仏教説話

さい」と言うんです。

「これによりて鶴垂郡の衣女の身と為りて甦る。すなはち言はく「此れ我が家にあらず。わが家は鶴垂郡に有り」といふ。山田郡の衣女の身体が残っていたのです。そこへ鶴垂郡の衣女が甦るのです。そして「ここは私の家じゃない。私は鶴垂郡に家があるんです」と。すると、両親が言うんです、

「「汝は我が子なり。なにゆゑぞ然言ふ」といふ」「あんたは私の子じゃないか。どうしてそんなことを言うんだ」。

「衣女なほ聴かず、鶴垂郡の衣女の家に行きて言はく「元の家に行つて言った、

「「当に此れ我が家なり」」「これが私の家だ」と。

ところが、その両親が「あんたは私の子じゃない」と。「私の子はもう焼いてしまつたんだ」と。

話が分からないでしょ。衣女Aさんと衣女Bさんがいる。本当はAさんを連れて行かないなら、Bさんを連れて行く。ところが代わりにBさんを連れて行ったことがバレたので、やっぱりAさんを連れて来させてBさんを返す。返そうとしたんですけど、Bさんの死体はもう焼いてあつて、無かつた。そこでBさんはAさんの死体はまだ焼いて

なかったもんですから、Aさんの体に入って甦った。ところが、姿はAさんで自分はBさんですから、「私の家じゃない」って言うんです。そして自分の家に行くと、「お前は私の子じゃない」と。そういう話なんです。そこでどうしたかと言うと、

“此に衣女具に閻羅王の詔の状を陳ぶ。時に彼の二つの郡の父母聞きて諾信ひ、二家の財を以ちて許可し付属く”

“このゆゑに現在衣女四の父母を得、二の家之宝を得たり”

“饗を備へ鬼に賂ふ、此れ功虚しきことあらず。おほよそ物有らばなほ賂ひ饗すべし。是れまた奇異しき事なり” 二人の衣女は四人の両親をもらって二軒の家の財産を手に入れたと。

こんなもの、めでたしめでたしですかね。話がものすごく分かりにくいので後からみんなちゃんと読んでください。話が非常に分かりにくい。そしてこれ不思議なのは、饗を備へ鬼に賂ふ、此れ功虚しきことあらず”。ここはよく国文学の世界でも議論があるところですが、鬼に賂賂を与えた。“此れ功虚しきことあらず” 効果がないわけじゃない。ちゃんと効き目があるんだと。ところが、病気の神様にお供え物をして、そのお供え物を鬼に与えたのは山田郡の衣女であって、その人は最終的には死んじゃったんでしょ。だからそ

はじめの仏教説話

んなことしてもダメだったっていう話なら分かるんですけど、それは良いことだ、良かったという大変な話になるんです。これは元々の話は中国種なんです、日本へ来た時にこうなったんです。どうなったかという、鵜垂の衣女が山田の衣女の体を借りて甦る時に王様が言うには、「其れを得て汝の身とせよ」。これによりて「これによりて鵜垂郡の衣女の身と為りて甦る」。山田の衣女は「他の人の体になって」甦ったというんです。心とか精神とかそういうことを問題にしているんじゃないんです。見た目の、外見がその人であればその人なんです。この日本の説話は。山田の衣女は死んだ。だけど山田の衣女は鵜垂の衣女(の体)となつて甦った。外見、肉体を中心にしてものを言うんです。これが日本の特徴です。中国のものを使っておきながらこうなつたと。これは余談ですが。

「饗を備へ鬼に賂ふ、此れ功虚しきことあらず。おほよそ物有らばなほ賂ひ饗すべし。是れまた奇異しき事なり」

この話は一体何を説いているのだろうかという、要するに「物有らばなほ賂ひ饗すべし」物があつたら人に施しなさいと言っているんです。そういう話には聞こえないですよ。我々がコマーシャル見ますと、何のコマーシャルか分からないけれども面白いっていうコマーシャルがあります。何の宣伝だったかいつこうに覚えていないけれども、コマー

シヤルそのものの面白さというのがある。これはまさにそうなんです。話そのものは面白いけど結局言いたいことは何かというと「施しは大事ですよ」。たかがそれくらいのことを言うためにこの遠回りがすごいでしょ。「施しは大事ですよ」と言うために衣女Aさんと衣女Bさんの複雑な話がある。先ほどの檜の磐嶋の話も「寺の財産を増やすお手伝いは大事ですよ」というために、あれだけ遠回りな話が出てくるのです。

「仏教説話」っていうのは、一つのことを言うための遠回りの仕方、先ほど言いましたように、言葉っていうのはこちら側の世界のもので、こちら側の者、悟っていない者ばっかりを相手にしたものが「仏教説話」なんです。何とかして目を覚まさせよう、ちょっとでも耳をすまさせよう、耳を傾けさせよう、というその努力が遠回りなんです。言いたいことはわずかです。「良いことをしましょう。悪いことはするな」、良いこととは何か、これこれこれ…、悪いこととは何か、これこれこれ…って余程のバリエーションがあるわけじゃない。簡単なことを言うためにとんでもない遠回りをする。遠回りの仕方、回り道の仕方が面白いのです。この回り道が我々文学分野の人間には楽しいんですが、ただあまり回り道をしますと何だったんだらうかと、かえって何の商品のコマーシヤルか分からないというような状況になってきます。「仏教説話」ってこんなものなんです。要するに趣

はじめの仏教説話

旨は簡単なことなのです。遠回り、遠回り、遠回りする。外国語にはけつたいな響きがあるなあ、あの言葉はあれに似とるなあ、弥勒菩薩は「いたい、いたい」と言つとるような仏さんやなあ…、そこら辺りの関心から少しでも耳を傾けさせようと、そういう努力なんです。お経の話とか堅苦しい話を何とかして人に聴いてもらおうと思うと努力がいます。その努力がこういつた変な作品になったと思います。

これが『はじめの仏教説話』です。みなさんお聞きになって頂いた方もいらつしゃいますし、しつかり爆睡されている方もいますけれども、お目覚めになった後に、きつとあの先生は私が眠っている間に素晴らしいことを言ったんだと、眠っていた私が悪かったと、そういう反省の心を持っていただくことが、この南無阿弥陀仏の世界に近いもので、ある意味では宗教講座の意義があると思うんです。しつかり聞いて「なんだ、つまらない」と、そういう思いをもつよりその方がいいかもしれません。

今申しましたように、「言葉」というのはこちら側の世界であつて、「悟り」とか「涅槃」というのはあちら側の世界です。「言葉」で書かれたものはどうしてもこちら側の、悟っていない、ダメな人間向きのことが書かれるんです。ダメな人間にしつかり耳を傾けさせようという、そういう配慮。ダメな人間が抱く「弥勒菩薩は痛いんだな」とか、変な

ところ、そういう感覚を持った人に共感してもらおうところから話を持っていく、そのような世界だということが分かっていただけだと思います。

「仏教説話」は、趣旨としては非常に簡単なことしか説いていないんですけれども、どのように遠回りしたかということを見ていくと、それだけ遠回りしたことを楽しんだ人たちの気持ち、その時代の雰囲気に分かっていいと思います。

お話をはじめた頃と今とをくらべて、少しは興味を持っていただけなのであればいいのですが。

ご静聴ありがとうございました。

——二〇一二年六月二九日——